

及され、最後に明治維新に於ける活動に至つてゐる。日本精神が問題となり、明治維新が批判の對象の随一となれる今日、著者が南學を説いて維新の際の人材の活動に至り、此處に南學の傳統影響功績を力説された事は、序文に於て人材の養成を強調された事と共に又意味ある事であらう。

只我々は本書に於て學說そのもの、發展變遷や、その背後にあつてそれを然らしめる社會的原因等に觸れらるる事の少い事に淋しさを感じる。ともあれ本書の出現が我國思想史研究上に貢獻する所は我々の贅言を要しないであらう。(菊判本文一二八三頁、富山房發行、定價六・五〇)(岩城)

● 神ながらの道

寛 克彦 進講

本書は最近まで東大法學部の講壇に立たれつゝ、も神道の研究に於いて嚴然たる存在を示して居られた寛克彦博士が、大正十三年二月より五月迄八回に亘り、當時の皇后陛下即ち只今の皇太后陛下の御前に於いて進め奉りし講演の速記を補修せるものである。既に去る大正十五年一度剗剗に附せられてゐたが今全く装を新にし、菊版六百八十頁白クロス張りの清楚なる形を以て再び上梓公刊の運びに至つたのである。

博士は神ながらの道とは心の道であり、人間として人間を超越し、日本人として日本人を超越しつゝ、有する心の道、即ち天地と一致したる人間、人間その儘の日本人として有する理想信仰であるとする。而してその心の修養の爲めには、第一に皇國體を尊重し、第二に神社によりて神々を尊信し、第三に神典

を介して祖先の純粹なる理想信仰に一致し、その理想信仰を分析して自覺に迄高めればならぬと主張される。この三つの方法の内、本書は第三のそれを問題となし、博士一流の敬虔なる態度と方法とを以て神典を分析し、我國建國の理想信仰を解明し更にそれを現代日本の持つべき自覺として提示されてゐる。博士の所謂神典とは古事記、日本書紀、祝詞、古語拾遺、諸國の風土記、萬葉集、更に舊事本紀等を包括するもので、これらの諸文獻の内に神ながらの心を究明せんとしたのである。

かくて別天神並に神世七代の神々、神代本紀、彌榮の三段に分れる膨大な神ながらの道の體系が組織されてゐる。

しかしながら博士の抱持せられる高遠なる理想と、博士一流の論理の展開とは、未だ博士の學問に親近する機を持たぬ吾人にとつては遺憾ながら理解に困難なる多くの點を藏してゐる。しかも猶我々は、我々の生活するこの時代に於いて、本書再版の意義を深く考へさせられるのである。換言すれば純粹に歴史學的であるよりは、むしろ時代の流と共に強く叫ぶものがあると思へる。

後世の人、もし現代の一思潮を考究せんとする場合には、本書は正にその神典たるの存在を誇るであらう。こゝに我々はこの書を持つ現代史の意味を明確に會得する事が出来るのである。

(菊判六八〇頁、岩波書店發行、定價四・五〇)

● 史料大成 鹿苑日録の印行

近時國史學界に於いて、再檢討再批判が力強く提唱されつゝ、

ある趨勢と共に、その基礎をなす根本史料の集大成の印行が續々企劃實現されてゐるのは斯界の爲め誠に喜ばしき現象である而して最近に至り史料大成及び鹿苑日録の刊行が始められたのである。

嘗て藤原氏攝關時代の貴重なる日乘記録が笹川種郎、矢野太郎兩氏の努力によつて集成され、所謂史料通覽として公刊された。しかしこの史料通覽は當初の計畫を完成せずして、十八卷を以て中絶の止むなきに至つた。史料大成は再び笹川、矢野兩氏の校訂によつて、未完成の史料通覽を増補完成せんとして全三十卷に編纂されたものである。即ちこの公刊事業大成の曉には、先に未完成に終つた小右記、長秋記、兵範記、勸伸記等は完結し、更に新に吉記、吉綴記、平戸記、妙槐記、三長記、康富記等を加へて、藤原時代から鎌倉室町時代に至る大記録集が出現する譯である。

鹿苑日録は言ふ迄もなく相國寺塔頭鹿苑院々主の日記を集成したもので室町時代の長享元年から江戸時代の慶安四年に至る上下約百六十五年に亘る浩瀚な記録である。而して禪僧が當代の有力なる文化荷擔者であつた關係上、本書の内容は當時の禪苑に關する好資料たるは勿論、政治、經濟、藝術等各方面の史實を豊富に持つてゐるのである。しかし原本は既に關東大震災に灰燼に歸し、寫本とても大學等に便宜あるもののみが利用し得る有様であつた。然るに今本書全七冊として、辻善之助博士等の校訂により、既に第一回の配本を終へたのは、かゝる便宜

に浴し得ざりし研究家にとつて大なる福音である。のみならず内容廣汎なる本書の索引が附加せられるとの事は、利用者にとつて一層の便益であらう。

我等は以上の兩集成が綿密なる校訂を経て、着々上梓完成されることを願ふものである。(史料大成、全三十冊、一冊三〇二〇、内外書籍株式會社發行、鹿苑日録全七冊、一冊三・八〇、太平洋發行)(以上時野谷)

●民 間 傳 承 論

柳田 國 男 著

書肆共立社の刊行する「現代史學大系」中の一冊として、この書は早くよりわれわれの最も切に待望せるところであつた。蓋し、民俗學の概論としてバーンのハンドブックやジュネツプの小著は既に譯出されて、此方面の良書の少きを補つてはゐたがわが國に於けるこの學問の眞の創設者であり不斷の指導者であるところの柳田國男氏が自らの永き體驗と眞摯なる反省とを基として、この研究の意義目的領域並に方法の全般に亘つてその概要を示されることは、内、斯學に従事するものにとつて兎もすれば見失ひやすい全體への關聯とその方向とを示し、外、これと隣接する姉妹學科の研究者に對し、往々最も把み難いとされるその正しい輪廓とその實體とを得せしめるものとして、今日なほ依然として「謙遜なる無責任」と「好意の輕侮」の下におかれてゐる斯學にとつて最緊要事と考へられるからである。

勿論柳田氏のこの學問に對する抱負とそのシステムとは必ずしも今日まで聞かれなかつたわけではない。手近く氏の「郷土